子ども俳句と季節

―考現学の序章として―

谷地快一

私事で筆を起こすのは恐縮ながら、教職から解放されたのを機に、俳句の考現学とでもいうべき、新しい世界に足を踏み入れたい。万葉・古今・新古今というふうに、詩歌のよってくるところから語るのをやめて、今の俳句や短歌の現状から、俳諧や連歌の世界へと分け入り、やまと歌の魅力をひとくくりする試みである。

その一つとして、本稿では、子ども俳句の魅力が四季折々の風情でなく、外界を理解しようとする、いじらしい奮闘にあることを説く。そのために、俳句を古典と近代の垣根をはずして定義しなおし、季語がなくても、十七拍でなくても俳句と呼ばれている現状を承認する。

その上で、子ども俳句を分析し、外界を把握しようとする努力の多くが比喩によっていることを見届ける。さらに、その努力を稔りあるものにするために、季題とか季語という条件にしばられないよう提言する。季題とか季語という世界は、「もののあわれ」という美学がわかった上での趣味であるからだ。

なお、子ども俳句のすべてが、親切心から十七拍の世界を五・七・五と、杓子定規に切って示すことに疑問を呈し、外界の理解のためには、むしろ、内容（意味）によって表記する方が効果的であるとし、私案を試みた。

こうした試みが、次代の文化を担う親や子ども、そして若々しい教師の情熱を支えるヒントにつながることを期待している。

一、俳句の定義と現状

俳句とは俳諧の発句（第一句）の別称である。その特色は有季定型、つまり当季と向き合う五・七・五の三つ部分で、合計十七拍で完結する長句形式にある（ただし、有季定型の「有季」を立項する辞書は見当たらない）。俳句も俳諧も本来は会席の文芸であるから、その当座の季感（季題・季語）を重んじるという原則がある。この原則が崩れるとき、その作品は俳句的（俳句のようなもの）ではあっても、俳句とはいえなくなる。なお、それが詩である以上、自然観照や人の暮らしがもたらす感動を内容とするのはいうまでもない。その例句を示せば次の通り（傍線部は季題）。

古池や蛙飛びこむ水のおと（松尾芭蕉・蛙合）
わが影に畦を塗りつけ塗りつけて（高野素十・初雁）

ところが、近代に至り、俳句（有季定型）に対する無季俳句なることばが生まれた。季感（季題・季語）を含まない句の存在価値を主張するもので、たとえば次のようなものである。

見えぬ眼の方の眼鏡の玉も拭く（日野草城・人生の午後）
戦争が廊下の奥に立つてゐた（渡辺白泉・白泉句集）

これは、俳句を古典から切り離し、当季を詠みこむという束縛を解いて、その世界を拡張するという主張がこめられているのであろうか。ただし、無季俳句という呼称はないものの、「亡き母や海見るたびに見るたびに」（小林一茶・七番日記）という句のように、近世にも季感（季題・季語）のない句はあった。これを雑（ぞう）の句という。つまり、有季か無季かという二項対立は近代以後の議論であって、どちらに軍配があがっても不毛なことのようでもある。

さらに近代俳句では、自由律俳句と称して、十七拍（五・七・五）という韻律からも解放する道が追究され、内在律というむずかしいリズム感も生まれた。次のような例句がそれである。

墓のうらに廻る（尾崎放哉・大空）
うごけば、寒い（橋本夢道・無礼なる妻）

俳句の形式が歴史的に定義されている以上、その約束を守らない句は、詩的ではあっても俳句ではない。その意味で、無季俳句や自由律俳句という主張は素人（しろうと）の言いがかりに似ている。仮に国民性として、素人を好むところがあるにしろ、それを玄人（くろうと）をおとしめる根拠にして、混迷を助長してはなるまい。しかし、今はこのような主張をしにくい現状にある。

二、教材の選定

本稿はこうした現状を整理して、俳句という文芸をたしなむ際の、不安を取り除く試みで、教材として『こどもはいくかるた』（Gakken）を拝借する。

これは、いわゆる「あいうえおカルタ」（学習カルタ）で、箱に「五味太郎・絵」、「『産経新聞』「ちびっこ俳壇」より」とあるが、刊記はない。読み札は縦約15・5糎×横4糎。絵札は8×8糎。各46枚入り。絵札は伝統的な「いろはカルタ」同様に、絵と句頭の一文字（ゴシック）を描くが、文頭に用いない「を」「ん」については一句の途中から抽出している。

同梱の解説文に「リズムが、ことばの世界を広げます」という題目

で、「俳句はご存知のように、五・七・五のリズムで語る季語を含んだ定形詩で、世界で最も短い文学様式」と定義し、目的として「子どもたちも、同年齢の作品にふれることで、俳句作りへの興味を無理なく持てるでしょう」と謳（うた）う。また、利用方法として「幼児の場合は必ずしも、季語にこだわらず、五・七・五をリズムを生み出すものと考え、ことば遊びのつもりで楽しんでみましょう」とあり、上五・中七・下五の間を半角あけ（余白）にする工夫は、リズムを覚えるための配慮であることがわかる。「幼児の場合は必ずしも、季語にこだわらず」とあるのは、子どもにおいて季語の扱いが、いかに難しいかを承知しているからであろう。

さらに、解説文には「自然への興味が増し、イメージがふくらみます」という題目で、「俳句を作ってみようということで、身の回りのようすや出来事をじっくり観察する力が育ちます」「感じたことをことばでまとめようとすることで、表現力が豊かになります」とし、「こうした経験が文字への興味や、読書力への基礎となるでしょう」「さあ、子どもと一緒に、指を折りながら俳句を作ってみましょう」と提案している。

また、このカルタを生んだ産経新聞・文化部の小川記代子氏の「ちびっこ俳壇から」という文章も添えられて、この企画が生まれる経緯と期待が、次のように述べられている。

一、「ちびっこ俳壇」は、ある子どもたちの塾で行われている、俳句を作る試みから生まれたコーナーである。

二、子どもは意識せずに俳句を作る。それはことばが自然と気持ちのいいリズム、五・七・五になるから。

三、おかあさんたちが、ふと耳にした子どものつぶやきを書き留めたら、俳句になっていた、「ちびっこ俳壇」にはこんなはがきがたくさん来る。

四、たいてい、おうちの方が代筆するが、なかには覚えたての字で、はがきいっぱいに書いてあるものもある。

五、指のしわを「寂しい顔」、みそしるは「豆腐のお風呂」など、毎週送られてくるはがきに、自然と顔がほころんでくる。

三、子ども俳句一覧

考察に先立ち、以下に読み札に従って俳句を一覧する。その掲出にあたっては、考察の便を考慮して、五十音順に、丸数字の通し番号を付した。また作者や編者にその自覚があるかどうかよらず、季感（季題・季語）を認めうることばに、私に傍線を付け、かつ（　）内にその季節を示した。さらに、上五・中七・下五の間の余白も読み札の通りである。なお、読み札に記される作者名・居住地は考察の対象外であること、および個人情報に配慮すべき時代であることを理由に削除し、年齢は参考として残した。

①あめふったから　ぱんつのなかも　ぬれたんだ（3歳）
②いちごじゃむ　ぬったらぱんが　てれている（6歳）
③うろこぐも　おそらがざらざら　しているね（4歳・秋）
④えんとつは　けむりのおうち　たかいなあ（6歳）
⑤おっぱいが　のみたいけれど　ぼくにさい（2歳）
⑥かたつむり　からをぬいだら　くじらさん（3歳・夏）
⑦きんぎょちゃん　いやよいやよと　およいでる（2歳・夏）
⑧くっきーを　あまいねんどで　つくりたい（4歳）
⑨けずったえんぴつ　とんがりぼうしの　まじょみたい（3歳）
⑩こいのぼり　めざしになって　さらのうえ（3歳・夏、春）
⑪さくらんぼ　ふたごをたべて　ひとりっこ（2歳・夏）
⑫しゃっくりは　むねとおなかの　じしんだね（8歳）
⑬すりばちの　なかでごまさん　めまわる（2歳・秋）
⑭せっちゃくざい　ぼくとままも　くっつけて（5歳）
⑮ぞうさんの　はなのしゃわーが　かぶりたい（4歳）
⑯だいこんを　さかさにしたら　ろけっとだ（5歳・冬）
⑰ちきゅうぎの　なかのにっぽん　かわいいね（4歳）
⑱つめきりが　あしのつめを　たべちゃった（2歳）
⑲てんてんてん　てんとうむしが　てにとまる（5歳・夏）
⑳とうもろこし　ぱぱとおんなじ　おひげある（2歳・秋）
㉑ながいもは　おとうさんの　あしみたいだね（3歳・秋）
㉒にわとりさん　ごめんねたまご　たべちゃった（5歳）
㉓ぬいたての　かわいいようふく　ありがとう（6歳）
㉔ねむいなあ　ぼくもかえると　ねようかな（7歳・春）
㉕のりまきは　くるくるまくよ　おいしそう（6歳）
㉖はんぶんこ　おおきいほうは　ぼくのやで（6歳）
㉗ひとくちと　いってかあさん　けーきとる（3歳）
㉘ぶたさんが　こえもおならも　いっしょだぶー（2歳）
㉙へやのなか　ぐるぐるはしる　めもまわる（3歳）
㉚ほんよむと　ぱぱがさきに　ねてしまう（4歳）
㉛まんまるめ　すいちゅうめがねは　かえるのめ（5歳・春）
㉜みいらはね　はずかしいから　ほうたいまく（6歳）
㉝むずかしい　べんきょうなんて　もういやだ（6歳）
㉞めをあけて　さかながねてる　ふしぎだな（3歳）
㉟もみじのは　しんごうみたいで　ふしぎだな（4歳・秋）
㊱やまにはね　やさしいかぜが　ねむってる（7歳）
㊲ゆきだるま　おひさまあびて　だいえっと（9歳・冬）
㊳よぼうせっしゅ　なかないけれど　ふるえたよ（4歳）
㊴らいおんさん　おひるねばかり　あそびなさい（2歳・夏）
㊵りさちゃんの　おうちへいって　らんらんらん（4歳）
㊶るすばんを　たのまれたんだ　ちらかした（6歳）
㊷れいぞうこ　たべものいっぱい　たべてるね（4歳・夏）

㊸**ろ**うそくのひ　だんすみたいだ　おどってる（3歳・秋）
㊹**わ**あたかい　くれーんしゃ　くもまで　とどきそう（4歳）
㊺さいだー**を**　あけたらぷしゅっと　おならした（5歳・夏）
㊻へ**び**さんて　いろんなかたちして　あそんでる（4歳・夏）

四、子ども俳句の修辞

考察に入る。子ども俳句には比喩が多い。本稿で取り上げるのは擬人化・オノマトペ・見立て・直喩・隠喩という五種類の修辞法で、その総数は三十句にのぼる。丸数字で示せば、①②③④⑥⑦⑨⑩⑪⑫⑬⑮⑯⑱⑲⑳㉑㉕㉘㉙㉛㉜㉟㊱㊲㊵㊷㊸㊺㊻である。

これらは全四十六句の六十五パーセントにあたり、この教材のもっとも特徴的な表現といえる。子ども俳句の特色といってもよい。その比喩の内訳を多い順に示せば、十一句（37％）が擬人化、七句（23％）がオノマトペ、五句（17％）が見立て、四句（13％）が直喩、三句（10％）が隠喩となる。以下に、この順序で各句の内容に言及する。

＊

まず、次の擬人化による十一句を列挙する。

②**い**ちごじゃむ　ぬったらぱんが　てれている（6歳）
⑪**さ**くらんぼ　ふたごをたべて　ひとりっこ（2歳・夏）
⑬**す**りばちの　なかでごまさん　めまわる（2歳・秋）
⑱**つ**めきりが　あしのつめを　たべちゃった（2歳）
⑳**と**うもろこし　ぱぱとおんなじ　おひげある（2歳・秋）
㉜**み**いらはね　はずかしいから　ほうたいまく（6歳）
㊱**や**まにはね　やさしいかぜが　ねむってる（7歳）
㊲**ゆ**きだるま　おひさまあびて　だいえっと（9歳・冬）
㊷**れ**いぞうこ　たべものいっぱい　たべてるね（4歳・夏）
㊺さいだー**を**　あけたらぷしゅっと　おならした（5歳・夏）
㊻へ**び**さんて　いろんなかたちして　あそんでる（4歳・夏）

②はイチゴジャムを塗ったパンを、恥ずかしくて赤くなった人の顔とみた。

⑪は一つのサクランボの花芽が二つずつ実をつけることを発見して、それを双子に見立てた擬人化で、その一つを食べたので、一人っ子になったとつぶやいている。

⑬は母親がすり鉢でゴマをすりおろす様子を覗きながらのつぶやきである。

⑱は母に爪を切ってもらっている際の会話の一つか。今どきの爪切りはカバー付きであることから、切られた爪が飛び散らない様子を擬人化した。

⑳は玉蜀黍（南蛮黍・唐黍）の雌しべを父親のヒゲとみる擬人化。

幼児にありがちなつぶやきだが、これをヒゲと呼ぶのは今に始まったことではない。

㉜の「みいら」はミイラ。テレビドラマでも見たのだろう。包帯をして動きまわる不思議に、恥ずかしいゆえに顔を隠すのだという、一つの答えを出した句。

㊱は句意明瞭ならざるところがあるが、山に有情を見届け、その山を歩く際の穏やかな風に、市街地にない優しさを感じとったものか。

㊲は陽気のせいで溶けてゆく、雪だるまに感情移入した句。

㊷は冷蔵庫の擬人化だが、成長に従って語彙が増えれば「たべてるね」という認識は消えるたぐいか。

㊺はサイダーの口を開ける際の炭酸音を人間のオナラ（屁）に見立てた擬人化で、オナラ自体に感じていたであろう興味までもが描かれる。

㊻は蛇の不思議な動きに、遊びまわる人間の子どもを重ね合わせた。幼児にとって、遊び以上の解釈は不可能なのである。

なお、⑪さくらんぼ（桜桃）、⑬ごま（胡麻）、⑳とうもろこし（玉蜀黍）、㊲ゆきだるま（雪達磨）、㊷れいぞうこ（冷蔵庫）、㊺さいだー（サイダー）、㊻へび（蛇）などは季感（季題・季語）と認める言葉だが、これらについては後述の「六、季題（季語）の問題」で検討する。

＊

次にオノマトペ（いわゆる擬音語・擬態語）による七句を読み解く。

③うろこぐも　おそらがざらざら　しているね（4歳・秋）

⑦きんぎょちゃん　いやよいやよと　およいでる（2歳・夏）

⑲てんてんてん　てんとうむしが　てにとまる（5歳・夏）

㉕のりまきは　くるくるまくよ　おいしそう（6歳）

㉘ぶたさんが　こえもおならも　いっしょだぶー（2歳）

㉙へやのなか　ぐるぐるはしる　めもまわる（3歳）

㊵りさちゃんの　おうちへいって　らんらんらん（4歳）

③は〈空の鱗雲がざらついて見える〉という意。「ざらざら」を副詞として、空にあって手に触れることのできない雲を、あたかも触れているかのように表現した。語彙や表現力の不足がもたらす味わいでもある。

⑦は金魚がカラダやヒレをくねらせて泳ぐさまを、不承知の意思表示とみた。言語能力が十分ではない幼児が、嫌がったり、しぶしぶ承知したりする仕種から思いついたものであろう。「いやよいやよと」は副詞「いやいや」に同じ用法。

⑲は天道虫が飛んできて、手に止まる一瞬を書き留めたものである。その整った韻律は母親など、他者が記録したことを示すと思われ

る。名詞「てんてんてん」が水玉模様をとらえた擬態語となっている。

㉕は寿司屋で職人の様子を観察したとみるより、家庭で親と一緒に巻き寿司の実践を楽しんでいると読む方が余韻豊かに思える。「くるくる」という副詞の軽やかな擬態語が全体を生き生きさせている。

㉘は豚の声とおなら（屁）に共通する音「ぶー」を発見して興じる。おそらく、自分のおならも思い出してのことだろう。他者（母）の聞き取りであろう。

㉙は同じところを何度も回って、平衡感覚を失う遊びで、誰にも記憶のあるところ。副詞「ぐるぐる」は少しも巧むところがないが、それも子どもの語彙の特徴。

㊵は仲良しの家に遊びにゆく期待、あるいは遊んで戻ったあとの余韻か。「らん」は二度の繰り返しで光り輝くさまをいうが、「らんらんらん」と三度繰り返すことで、身も心も弾む姿が眼前に浮かび、これ以上のオノマトペはないといってよい。

なお、③鱗雲（鰯雲・鯖雲）、⑦金魚、⑲天道虫が季感（季題・季語）のある言葉である点については、後述の「六、季題（季語）の問題」で取り上げる。

＊

次に見立てによる五句を整理する。

①あめふったから　ぱんつのなかも　ぬれたんだ（3歳）
④えんとつは　けむりのおうち　たかいなあ（6歳）
⑥かたつむり　からをぬいだら　くじらさん（3歳・夏）
⑩こいのぼり　めざしになって　さらのうえ（3歳・夏、春）
⑯だいこんを　さかさにしたら　ろけっとだ（5歳・冬）

①はお漏らし（失禁）を雨に見立てるもので、子どもの弁解と言ってよいだろう。

④は火元に関心が向くことなく、煙突そのものを煙の家に見立てた句である。

⑥蝸牛（ででむし・まいまい）は殻を取ったらナメクジ、という話は聞くが、鯨に見立てるとは大胆で、残酷な童謡のようでもある。蝸牛の異名であるナメクジラ・ナメクジリなどが発想の原点か。

⑩は食卓に目刺が並べて出ている様子に、鯉幟の泳ぐさまを思い出した。そんな見立てであろう。

⑮は象が鼻で水を吸って、にわか雨のように振りまく。触れ合える動物園などに出掛けた際の、そうした期待を口にしたもので、象の鼻をシャワーヘッドに見立てた。

なお、⑥蝸牛、⑩鯉幟・目刺、⑯大根が季題である点については、後述の「五、季題（季語）の問題」で取り上げる。

＊

最後に直喩と隠喩の例句である。まず直喩四句から。

⑨**け**ずったえんぴつ　とんがりぼうしの　まじょみたい（3歳）
㉑**な**がいもは　おとうさんの　あしみたいだね（3歳・秋）
㉟**も**みじのは　しんごうみたいで　ふしぎだな（4歳・秋）
㊸**ろ**うそくのひ　だんすみたいだ　おどってる（3歳・秋）

この四句をを直喩とする根拠は、比況の助動詞「みたい（如し）」を用いるところにあり、それぞれの句が美しいかどうか、適切かどうかは別にして、⑨は鉛筆の削られた先が魔女のかぶる尖（とが）った帽子に、㉑は長芋が毛の生える父親の足に、㉟は紅葉や黄葉が信号機の色に、㊸は蠟燭（ろうそく）の揺れる炎が舞踏の様子に似ているというのである。擬人化や見立てを好む子どもの眼を、ここにも確かめることができる。

続く隠喩三句は次の通り。

⑫**し**ゃっくりは　むねとおなかの　ししんだね（8歳）
⑯**だ**いこんを　さかさにしたら　ろけっとだ（5歳・冬）
㉛**ま**んまるめ　すいちゅうめがねは　かえるのめ（5歳・春）

⑫はシャックリを地震に、⑯は大根をロケットに、㉛は水中眼鏡を蛙の目になぞらえる句である。それぞれ、断言している点で、直喩とは区別する。

なお、㉑の長芋、㉟の紅葉・黄葉、⑯の大根、そして杓子定規にいえば、㊸の踊りと、㉛の蛙も多くの歳時記に立項される、季題とか季語と認定される言葉だが、これらについては後述の「六、季題（季語）の問題」で取り上げる。

五、子どものつぶやき

これまで、比喩（擬人化・オノマトペ・見立て・直喩・隠喩）という視点で、他と区別できる句に解説を加えてきたが、ここでは比喩という枠組みでは捉えられない、子ども俳句のつぶやきを整理する。モノローグやツイートの類で、表現としては素朴なものである。

その最初は願望を口にする例である。

⑤**お**っぱいが　のみたいけれど　ぼくにさい（2歳）
⑧**く**っきーを　あまいねんどで　つくりたい（4歳）
⑭**せ**っちゃくざい　ぼくとままも　くっつけて（5歳）
㉔**ね**むいなあ　ぼくもかえると　ねようかな（7歳・春）

⑤は年齢からみて、母親によるわが子のスケッチであろうが、たどたどしい会話や表情から、こうした願望や抑制が読み取られることはめずらしくない。⑧はクッキーだから、粘土も甘いものが欲しいと願

い、⑭は接着剤に本来の用途以上の要求をする句。㉔は蛙の登場で意味不明なところがあるが、七歳は眠たい欲求を自ら口にするには十分な年齢である。

願望には次のように、その欲求が表現の奥にひそんでいるものもある。

㉖**は**んぶんこ　おおきいほうは　ぼくのやで（6歳）
㉗**ひ**とくちと　いってかあさん　けーきとる（3歳）
㉚**ほ**んよむと　ぱぱがさきに　ねてしまう（4歳）

㉖は兄弟同士にめずらしくない会話。㉗や㉚は子どもの発言や表情ではあっても、十七拍にまとめるにあたっては、親との共同作業であったと思われる。いずれも、食べたい、読みたいという願望が根底にある。

つぶやきには、他に感動・感謝・驚きの気持ちを、そのまま口にしたような句もある。

⑰**ち**きゅうぎの　なかのにっぽん　かわいいね（4歳）
㉓**ぬ**いたての　かわいいようふく　ありがとう（6歳）
㉞**め**をあけて　さかながねてる　ふしぎだな（3歳）
㊹**わ**あたかい　くれーんしゃ　くもまで　とどきそう（4歳）

⑰は地球儀でみる日本を、相対的に「かわいい（小さい）」と喜び、㉓の「ぬいたての」という措辞は母親からの助けがあったのだろうが、前の句にも見えた「かわいい」と「ありがとう」の二語は育児の局面で頻繁に繰り返されることばである。㉞は眠るときは目をつむるという常識を疑うような驚きをみごとにまとめ上げ、㊹はクレーン車のアームが、子どもにどれほど高く、大きく見えるかという点は、まことに素直な驚きといってよい。

内省・嘆息という視点から判断して、屈折した感情をまとめ上げた句も少しある。

㉝**む**ずかしい　べんきょうなんて　もういやだ（6歳）
㊳**よ**ぼうせっしゅ　なかないけれど　ふるえたよ（4歳）
㊶**る**すばんを　たのまれたんだ　ちらかした（6歳）

㉝は誰もが一度はつぶやいた経験がある拒絶感。㊳は注射に誠実に向き合った心の振幅。㊶は大人の期待通りに留守番をするつもりが、逆の結果になったことへの、ことばにならない反省。いずれも子どもながらに、深い溜め息が聞こえるようで、微笑ましい。

以上、手探りで、子どものつぶやきを分類してみたが、最後に残った二句を、呼び掛けとして紹介して、この項目を終える。

㉒にわとりさん　ごめんねたまご　たべちゃった（5歳）
㊴らいおんさん　おひるねばかり　あそびなさい（2歳）

㉒はニワトリへ呼びかけた謝罪だが、その対象である卵の生みの親（ニワトリ）が傍らにいるわけではなさそうだ。食卓などで、その卵の親がニワトリであることを聞かされた際の独り言でであろう。㊴はおそらく動物園の一コマ。ごろりと寝そべって、目をあけても、遠くを見るばかりのライオンに呼び掛けた句。要求が「あそびなさい」であるところに子どもらしさが出ている。

六、季題（季語）の問題

これまで見てきた子ども俳句を要約すれば、その魅力は第一に全体の六十五パーセントに及ぶ比喩表現である。それは外界に存在する客観的世界の一つ一つが新鮮で、すでに身につけている知識を動員して比較を試みる。

子どもにとって比喩とは、それを理解するための精一杯の学習であった。また、その他のモノローグやツイートには、言い捨てとして、やがて記憶の外に追いやられてしまうであろう、それぞれの成長過程に応じた願望や感謝、内省や嘆息が詰め込まれて、それを聞き留める大人の感動に結びついている。子ども俳句の魅力と限界はここにあり、季感（季題・季語）という要素を求めるのは無理難題であるように思われる。

それを確かめるために、重複をいとわず、季題（季語）を含む句を季節順に排列し直してみる。

《春》二句

㉔ねむいなあ　ぼくもかえると　ねようかな（7歳・春）
㉛まんまるめ　すいちゅうめがねは　かえるのめ（5歳・春）

春は蛙を季題（季語）とする二句である。だが、前者は蛙がいる場所がわからないし、句の内容から両生類のそれか、縫いぐるみか、判断に迷う曖昧さをはらむ。また、後者は内容から、水泳（水中眼鏡）の句ととれなくもない。そうであれば、春ではなく、夏季の句である。蛙は春の景物として、その声を愛で、春の胎動にその季感を見てきた。両句にそれはない。

《夏》九句

⑩こいのぼり　めざしになって　さらのうえ（3歳）
⑪さくらんぼ　ふたごをたべて　ひとりっこ（2歳）
⑥かたつむり　からをぬいだら　くじらさん（3歳）
⑦きんぎょちゃん　いやよいやよと　およいでる（2歳）

㊺さいだーを　あけたらぷしゅっと　おならした（5歳）
㊻へびさんて　いろんなかたちして　あそんでる（4歳）
⑲てんてんてん　てんとうむしが　てにとまる（5歳）
㊴らいおんさん　おひるねばかり　あそびなさい（2歳）
㊷れいぞうこ　たべものいっぱい　たべてるね（4歳）

夏はこの九句である。桜桃と天道虫の句に素直な味わいがあるが、その他には季感が欠落している。すなわち、鯉幟は邪気を払う男児の節句。蝸牛は弱々しさと、その角に興味を寄せてきた題目。金魚は涼しげな景物で、サイダーも清涼感がその味わい。蛇は鼠などを食べて有益、燕の子などを食べて人を悲しませてきた生き物。昼寝は夏の体力回復法であり、冷蔵庫は腐敗から食物を守るもの。子どもの句にこうした季感を求めるのはむずかしいのである。

《秋》六句

③うろこぐも　おそらがざらざら　しているね（4歳）
⑳とうもろこし　ぱぱとおんなじ　おひげある（2歳）
㉑ながいもは　おとうさんの　あしみたいだね（3歳）
㉟もみじのは　しんごうみたいで　ふしぎだな（4歳）
㊸ろうそくのひ　だんすみたいだ　おどってる（3歳）
⑬すりばちの　なかでごまさん　めまわる（2歳）

秋の句はこの六句である。あえて俳句かどうかという点で見れば、ものみな衰えゆく秋の象徴的な鱗雲（鰯雲・鯖雲）に荒れた空を読み取り、紅葉の美しさを信号機の色でとらえる目には一定の評価を与えられよう。一方で、玉蜀黍の句も、長芋の句も、胡麻の句も、収穫の世界に及ばない子どもの目を責められない。ましてや、踊りが盆踊りを意味するという知識を求めるのは愚かで、これまた、季題として読んではいけないことになる。

《冬》二句

⑯だいこんを　さかさにしたら　ろけっとだ（5歳）
㊲ゆきだるま　おひさまあびて　だいえっと（9歳）

この冬の二句はともによく観察していて興味深いが、季感（季題・季語）の理解という点では雪だるまの句に情が備わり、大根の句は言い捨てに終わっている。そもそも季題に無頓着な子どもに、伝統的な知識を求めてはいけないのである。

四季の移ろいに見届けられる季感（季題・季語）の魅力は、たとえば「つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを（業平・古今・哀傷）とか、「露の世は露の世ながらさりながら」（一茶・おらが春）という無常の系譜に頼っている。それを学ぶにはそれ

なりの成長が必要であろう。子ども俳句に季感（季題・季語）の教育はいらないということを述べてみた。

七、表記の問題

表現に向き合うときの子どもの関心が、四季折々の風情でなく、外界の理解にあることを確認してきたが、その達成のために、提案しておきたいことがある。それは文中で切る必要があるときには五・七・五と杓子定規に切るのでなく、意味（言葉の表す内容）によって切るという提案である。具体的にいえば、

㉒**に**わとりさん／ごめんねたまご／たべちゃった

と書けば「ごめんねたまご」という卵が実在するかのような誤解を与えかねない。それを避けるには、「にわとりさんごめんね／たまごたべちゃった」と意味によって分離すればよい。五・七・五と、すべてを等し並みに分けて、いたずらに混乱を招いてはいけないと思うのである。おせっかいながら、以下に私案を羅列しておく。

《初句切れ》

①**あ**めふったから／ぱんつのなかもぬれたんだ、③**う**ろこぐも／おそらがざらざらしているね、⑥**か**たつむり／からをぬいだらくじらさん、⑦**き**んぎょちゃん／いやよいやよとおよいでる、⑨**け**ずったえんぴつ／とんがりぼうしのまじょみたい、⑩**こ**いのぼり／めざしになってさらのうえ、⑪**さ**くらんぼ／ふたごをたべてひとりっこ、⑭**せ**っちゃくざい／ぼくとままもくっつけて、⑲**て**んてんてん／てんとうむしがてにとまる、⑳**と**うもろこし／ぱぱとおんなじおひげある、㉔**ね**むいなあ／ぼくもかえるとねようかな、㉖**は**んぶんこ／おおきいほうはぼくのやで、㉚**ほ**んよむと／ぱぱがさきにねてしまう、㉜**み**いらはね／はずかしいからほうたいまく、㉝**む**ずかしい／べんきょうなんてもういやだ、㉟**も**みじのは／しんごうみたいでふしぎだな、㊱**や**まにはね／やさしいかぜがねむってる、㊲**ゆ**きだるま／おひさまあびてだいえっと、㊳**よ**ぼうせっしゅ／なかないけれどふるえたよ、㊷**れ**いぞうこ／たべものいっぱいたべてるね、㊸**ろ**うそくのひ／だんすみたいだおどってる

《中七切れ》

④**え**んとつはけむりのおうち／たかいなあ、⑤**お**っぱいがのみたいけれど／ぼくにさい、㉕**の**りまきはくるくるまくよ／おいしそう、㉙**へ**やのなかぐるぐるはしる／めもまわる、㉞**め**をあけてさかながねてる／ふしぎだな、㊴**ら**いおんさんおひるねばかり／あそびなさい㊵**り**さちゃんのおうちへいって／らんらんらん、㊶**る**すばんをたのまれたんだ／ちらかした

《不規則な切れ》

②いちごじゃむぬったら／ぱんがてれている、㉒にわとりさんごめんね／たまごたべちゃった、㉗ひとくちといって／かあさんけーきとる、㉘ぶたさんがこえもおならもいっしょだ／ぶー、㊹わあたかい／くれーんしゃくもまでとどきそう、㊺さいだーをあけたら／ぷしゅっとおならした

《切れなし》

⑧くっきーをあまいねんどでつくりたい、⑫しゃっくりはむねとおなかのじしんだね、⑬すりばちのなかでごまさんめまわる、⑮ぞうさんのはなのしゃわーがかぶりたい、⑯だいこんをさかさにしたらろけっとだ⑰ちきゅうぎのなかのにっぽんかわいいね、⑱つめきりがあしのつめをたべちゃった、㉑ながいもはおとうさんのあしみたいだね、㉓ぬいたてのかわいいようふくありがとう、㉛まんまるめすいちゅうめがねはかえるのめ、㊻へびさんていろんなかたちしてあそんでる

むすびに

私の守備範囲は俳文学（連歌・俳諧・俳句）である。かつて、その〈専門分野を踏まえ、「研究者として研究」することの意味とは何か〉と問われ、〈俳文学の研究を通じて詩歌の海に遊び、その感動を後世に伝えること〉（「教員が語る大学院の魅力」東洋大学ホームページ）と答えたことがある。

この心情に偽りはなく、四十年を超える講義や、毎年三十名前後が集う恵まれたゼミで、生きる力としての詩歌を説き、その暮らしにおける意義を語り続けた。しかし、まもなく社会に出て、自分の人生を切り拓かねばならない若者たちの、どのような後押しになり得たかを考えると、いかにも心許ない。

先方に届かない、この歯がゆい思いは、何も学生たちに対してばかりではない。縁あって、各地の自治体や、その教育委員会などが主催する講演や講座に招かれ、一般の人々に向けて、俳諧を中心に日本の詩歌の魅力を紹介してきたが、その後味は学生に向き合った場合に異ならない。

いずれも強い興味を抱いてはくれるものの、詩歌がその後の生活にとけ込むには至らないのだ。なかには、初等・中等教育の単元に、短歌や俳句の教材はあっても、授業が成立している教員はあまりいないのではないか、と嘆く現職の教員もいる。やまと歌が暮らしに根付かない原因は、私の力不足だけではなさそうだ。

こうした現状を理解する一つの手掛かりがある。平成九年（一九九七）に短歌誌『アララギ』が終刊となった。この組織は正岡子規門下の集う根岸短歌会を源流として、万葉調と写生を掲げ、生活に密着した歌風を以て、長く近代短歌の最大勢力であった。

彼らの社会的な役割は、近代俳句における俳誌『ホトトギス』が担

うものに似ていたが、『ホトトギス』の歴史が高浜虚子没後もその一族の経営によって守られているのに対し、『アララギ』の歴史は第二次大戦後に続いた有力会員の分離独立によって、結束力を弱めてゆく道を歩んでいる。

その『アララギ』終刊について、岡井隆に「「アララギ終刊」で考えたこと」（東京新聞、「うたの現在」平成9）という示唆に富むコラムがある。

これは長文でないこと、また誤読を避けねばならぬこと、そして、何よりも著者に敬意を払うべきことの三点を理由に、全文を掲げる。

「アララギ」が本年中に終刊するという。少年のころから「アララギ」をほぼ絶対的な価値として教え込まれた私は、自分の育った母郷のなくなるような寂しさを覚えるが、私情を離れて、ここに至った経緯を推測してみたい。

伝えられる「解散の理由」のうち、土屋文明の死（一九九〇年一二月）を除けば、中心歌人の高齢化と若手育成の困難の二つは、現代短歌が直面している難問であって、個々の結社のかかえ込んでいる状況を超えている。短歌そのものが、今しずかに滅びようとしているのであるから、大「アララギ」といえども、その運命にしたがって終焉を迎える外ないのである。潔い態度といえるのだ。短歌は型（かた）の習得のため五年十年を要する伝統文芸である。それも十代二十代の年少の時から、いわゆる歌好きになって熱中しないと習熟しないし、本当の面白さがわからないのが通例である。そういう文芸を誇りをもって作るためには、(1)伝統的民族的な文化の尊重、(2)古来伝えられた日本語への愛情が基礎になければならないが、敗戦後の日本にはこの両者が欠けていた。戦争に敗け外国に占領されるとは、そういうことなのであった。「幼な児の語調も変りくるといふにいかにか守らむこの日本語を」（文明）と、心ある先人は憂えたが、第二芸術論と誤まれる国語改革は、アメリカ文化の浸透と共に、短歌の生育する土壌を変えてしまった。私なども、そのことに気付くのはきわめて遅く、今ごろになって口惜しい思いをしている始末だ。「アララギ」が歴史的仮名遣いを固持してきたのは正しい態度だったが、教育界とマスメディアが新仮名と当用漢字を一般化してしまった以上、衆寡敵せずである。

「アララギ」は、もともと少数のエリート（もの好き、といってもいい）の結社で、「少数にて常に少数にてありしかばひとつ心を保ち来にけり」（文明）と歌われた通りである。近代文学そのものが本来、少数者が、深い伝統的教養を共有しつつ社会の片隅でひそかにとり行なう祭儀のようなものだ。つまり時代遅れの保守的な体質を持つ。いま文学の地盤沈下が言われるが、文化の大衆化は、もともと文学の体質に反するのである。

「アララギ」が築いた写生の理論。万葉集復興の文献。時代に即応した機敏な作品群。それら近代短歌の宝物を、私は静かに賞翫しながら、短歌そのものの〈秋〉を愛惜しつつこれからの歳月を過ごそうと思う。

一読して、俳句を含めた、伝統的な短詩型文芸の末世に言及していることは明らかで、杉浦明平の『戦後短歌論』（昭和二六・三　ペリカン書房）の読後感に似た動揺を禁じ得ない。要約すれば以下のようである。

岡井隆氏にとって『アララギ』は絶対的な価値であった。解散の理由は、①平成二年（一九九〇）の指導者土屋文明の死去、②中心となる歌人の高齢化、③若手歌人を育成することが困難の三点。だが②と③は『アララギ』を超えた、戦後日本が抱える難問で、短歌そのものが静かに滅びゆく運命を、『アララギ』も受け容れるしかないという。

その理由は何か。短歌は、まず型（かた）の習得が不可欠な伝統文芸。十代、二十代で歌好きになり、熱中する時間がないと身につかないし、面白さもわからない。こうした文芸を誇りに生きるには、伝統的民族的な文化の尊重と、古来の日本語への愛情を基礎とする。だが、敗戦後の日本にはこの両者が欠けていた。それが滅びる理由である。戦争に負け、外国に占領されるということは、そういうことなのだ。

具体的には、桑原武夫の「第二芸術」（岩波書店『世界』昭21・11）に始まる短詩型文学否定論に戸惑い、誤った国語改革（漢字廃止・制限論、当用漢字・現代かなづかい論）に、教育界もマスメディアも押し切られしまったことを指す。これでは、育つはずのものも育たない。短詩型文芸に勝ち目はなく、一巻の終わりなのだという。

だが、『アララギ』はもとから少数のエリート集団。いや本来、近代文学とは伝統を共有する少数者が、社会の片隅でひそかに執り行なう祭儀に似た世界あった。だから、文学に地盤沈下や大衆化などはあり得ない。しかし、こういう現状を招いたからには、短歌そのものが終焉に向かう歳月を、愛惜しつつ暮らすほかない。

この岡井氏の文章全体を流れる終末観に従えば、私の四十数年に及ぶ教壇の仕事などは、現実と歴史の見分けがつかないドン・キホーテの所業に見えてくる。だが、私は「俳諧の益（えき）は俗語を正すなり」（土芳『三冊子』）という松尾芭蕉のことばを拠りどころに、芭蕉晩年の「軽み」志向や、子規・虚子の「写生」という事業は、文化の擬死再生に不可欠な、大衆化路線であって、少数エリート集団のまつりごとであったとは考えない。その再生の兆しは「春暮れてのち夏になり、夏果てて秋の来（く）るにはあらず」（『徒然草』一五五段）という至言に似て、終末の景色のうちに、すでに見えているものではなかろうか。

新聞や短歌・俳句の結社誌が支えた、明治時代以後の文化に先が見えないという点で岡井氏の悲嘆に共鳴しつつも、日本の伝統的な詩歌を考現学という方法で、次代へ受け渡す模索を試みようと思うのである。

〔付記〕本稿は芭蕉会議（実作と研究の会）における「ゼロからの俳句塾」（令和元年九月十四日、於東京ルーテルセンター）において「無季の魅力」と題した講話を基礎にしている。なお、この場を借りて、教材とした『こどもはいくかるた』を編んだGakkenと、そのもとになった「ちびっこ俳壇」（産経新聞・文化部）に御礼申し上げる。

キーワード

有季定型・比喩・敗戦・国語改革・擬死再生